



協議会への期待

カトリック加古川教会員
加古川市議会議員 真田 千穂

日本民族は古来より「和を持って貴しと成す」の太子の十七条憲法の第一條の言葉を尊重してきており、現代では平和憲法第九條を世界遺産にとの運動が起つている。日本民族のこの連綿として引き継がれてきている平和への願いこそは、福音書が語る精神である。主は平和の基いであられる。主は言われる。「平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。」(マタイ五章九節)。日本民族はキリストの証し人、神の子として平和実現の為に世界に遣わされていく人々である。日本民族はすでにはっきりとした平和の印を帯びた人々である。この自覚を総福音化運動の中で私は強め抜けていきたいと考えている。

私の妹がドイツに駐在して三五年になつている。彼女が二〇年前前に「ドイツ人あるいは欧州人は、日本のキリスト教に非常に期待している。欧州のキリスト教はあまりにも形骸化して

いて、離婚も二組に二組の割合であり、神への信仰なしで人々は生きている。日本にこそまことの宗教、信仰が息づいていてと欧州の人々は思っている。」と電話で語ったことがあった。彼女自身「ミュンヘンの自由」という本を書いてミュンヘン市長も評価下さったそうだが、それはカトリック教会からの解放を書いたものだという。彼女はカトリックの純心高校、聖心女子大学を卒業してミュンヘン大学大学院で研究、学会活動で多忙。

欧州では一九五〇年代頃よりキリスト教神学の世俗化現象が起り、更にボンヘッファーの「獄中書簡集」により、伝統的な神学的世界を徹底的に否定する動きへと発展し「神の死の神学」へと広がっていった。二回の世界大戦の体験が大きな影響を与えたのであった。このような伝統的三位一体論の神学の否定の中から、ポールのリクールの伝統的神観を回復する動きがおこった。リクールは超越的力を

十分に自覚しながら、具体的な生活領域にどのように立ち現れるかを隠喩や物語りという言語媒体を通して明らかにしている。従来のキリスト教は具体的な生活領域、各国、各民族の伝統、歴史、神話などに配慮せずに一方的に福音を宣べ伝えてきたことへの反省が、そしてそれらへの積極的評価がリクールの考えの中にあると私は理解している。その観点から日本独自の文化、伝統、生活習慣の中にはっきりと神の超越的力、福音の証を見いだすことができる。これは神学上の世界共通の認識といえる。

私は現在、聖トマス大学院修士課程で宗教文化を学んでおり、世界の諸宗教を理解し、連携を深めていく過程の中にいる。キリスト教はユダヤ教からうまれたもので、ユダヤ教を、旧約聖書をよりよく知らねばならない。本年五月、ユダヤ人歴史学者シャハン博士が来日なされ、ユダヤと日本の類似性に驚いておられるとの確かな情報をいただいた。来年、博士はイスラエルの大学生達を率いて調査団を組織して再来日なされる。著書「失われたイスラエル十部族の足跡を求めて」の中で四百五十ページ中の三分の二を日本に関するものに当てて、ヘブライ語、英語で出版なされた。紀元前八世紀に歴史上から姿を消した古代イスラエル人達は確かにこの日本の地にシルクロードを通じて渡来してきたことを数々の証拠を数多く挙げて

証している。

更に時代は降つて紀元後四世紀には古代ユダヤ人であり原始キリスト教徒である秦氏族が渡来してきてこの日本の地に様々な形態でキリスト教の精神を根付かせていることもユダヤ人学者と日本人学者達によって明らかにされている。中国で唐時代に大流行した景教も日本に伝播してきたことが論じられている。このことの一事例として、本年十月、「聖書と日本フォーラム」の主催で行われた研修で、協議会の事務局長であられる高砂教会手束牧師により、地域の祭り「ツ物神事」がキリストの降誕祭であるとの提唱がなされた。これまで、行政として文化庁が日本の伝統文化の研究、調査、保存を推進している事業の中で、国家的にも二十世紀初頭より松本愛重、柳田国男等民族学者達が「ツ物」研究に取り組んでいるが、今回私も「聖書と日本フォーラム」に参加し、二十一世紀になつての兵庫県の具体的事業報告について、少しの時間発表をさせて頂いた。「ツ物」は「鳥の羽を挿して神を降ろし神に仕える者」の意が民族学の見解であり、「聖霊が鳩の如く降つて神の愛し子であることが明らかにされた」は、キリスト教的な解釈である。日本民族は不思議な力をいいたい。いる神の祝福の民であることを強く信じている。